

関根正二《子供》のいま

貝塚 健

1. はじめに

澄んだ水色を背景に、鮮やかな朱色の着物を着た5、6歳の少年が座っている。筆者には、床に腰を下ろしているのではなく、椅子に腰掛けているように思えるのだが、下半身は描かれず断定はできない。両手を軽く前に組み、少年は斜め右をまっすぐに見つめている。その確信的な眼差しは、子どもながらに、未来を真摯に受け止める決意に満ちているようだ。画家の遠藤彰子はこんなふう

に語っている。

この少年の姿には、少なからず衝撃を受ける。この肖像が、少年の属性をあまりにも備えているように見えるからだと思う。普遍性を持ちながらいたって个性的であることにも驚きだ¹⁾。

石橋財団ブリヂストン美術館が所蔵する関根正二の《子供》(fig.1)は、大きさ、縦60.9センチ、横45.7センチ。画面左上に「1919 / masaji」という年記と署名があり、1919年6月16日に20歳2カ月で肺結核により亡くなった関根の、最晩年の油彩作品であることを教えてくれる。前年9月、《信仰の悲しみ》(fig.2)、《姉弟》、《自画像》を第5回二科美術展覧会に出品した19歳の関根は、有望新人に与えられる樗牛賞を受賞する。それから一年経たず、関根は慌ただしく逝ってしまった。貧しく画材が十分に与えられなかったため、我々に残さ



fig.1
関根正二《子供》1919年、油彩、
石橋財団ブリヂストン美術館

れた彼の油彩画は少ない。最晩年の関根の画業を知る上で、この《子供》は貴重な作例となるだろう。また没後の神話じみた熱狂とも、この作品は関わっている。本稿で、この作品が持っている情報を整理し直し、その位置づけをあらためて考えてみたい。

2. 切断と再制作

1989年、この作品を額縁から外そうとしたとき、石橋財団ブリヂストン美術館の保存担当学芸員だった田中千秋には確信があったに違いない。《子供》は、画面の下層に現在の図柄と異なる絵具層があるのが、肉眼でも見えるからだ。作品を額縁から外した田中は、期待通りの事実、額縁で隠れていたカンヴァスの張り代部分に下層の図柄の絵具が続いていることに満足しただろう。田中はこの下層の図柄を突き止めていく。のちに田中は、関根による作品の切断と再制作について、こんなふう

にまとめている。

現在ブリヂストン美術館に所蔵される《子供》については、肉眼による状態調査の段階で以下のようなことが判っていた。①右辺の側面にまわったカンヴァスの端の部分「耳」には、画面とは無関係の絵具が残っており、それは明らかに途中で切断されている。②他の3辺の側面には絵具の外側に鋏の跡のある古い耳が残っている。③背景の青い絵具は、画面の端で切れているが、一部は耳にもまわっている。④下辺の耳には子供の着物の朱色が残っている。

以上のことから次のような推察が可能となる。



fig.2
関根正二《信仰の悲しみ》1918年、油彩、大原美術館

まずこの作品は、以前に制作されたより大きな別の作品の上に、塗り重ねるように描かれた後、制作の途上で切断された。そして現在の木枠に張り換えられ、最後に背景等に手を加えて仕上げられたのではない。

ではどんな絵の上にこの作品は描かれたのであろうか。背景の青色の下層には肉眼でも白と朱の色相を確認出来るが、その形や構図を読みとることは困難であった。そこで赤外線テレビカメラを用いた観察を行うことによって、右から左に広がる扇状の「白い面」と、中央で画面を左右に分ける「境界線」が上部と下部に確認できた (fig.3)。先ほどと同じように今度はこの赤外線写真の左辺が下辺となるように90度回転させると、これらの「白い面」と「境界線」は、《神の祈り》(fig.4)をはじめとする他の作



fig.3
《子供》の赤外線写真



fig.4
関根正二《神の祈り》1918年、
油彩、福島県立美術館

品に繰り返し出てくる女性の「衣服の裾」と「地平線」とに対応している。また画面上や右辺の耳に見られる白と朱の色面から、元のキャンバスにはこれら二色の衣服を着た二人の女性像が描かれていたと考えられる。

従って切断される前の本作品の上半分には女性の上半身が描かれていた筈であり、該当作と思われる《三人の顔》(fig.5)との写真の合成が試みられた。結果は《子供》の右辺の耳に残された色面と《三人の顔》の下辺端の色面が完全に一致し、二つの作品が繋がっていたことが確実となった (fig.6)。恐らく《三人の顔》の方の子供から描きはじめたが(女性の顔を塗りつぶしてしまうのは憚られたのか)途中で止め、新たに左に移って《子供》を完成させたと考えられる。画材を満身に買うことの出来なかった関根は、下層に描かれた女性の衣服の朱色を《子供》の着物の色に流用したのであろう。

また、下層にあった元の二人の女性像は、ちょうど《神の祈り》の左右を反転した鏡像のようであり、構図も非常によく似ている。両者を比較すると、この作品の画面向かって左の女性像は《神の祈り》の右側の女性像と同じく手



fig.5
関根正二《三人の顔》1918年頃、油彩、個人蔵



fig.6
《子供》と《三人の顔》の合成写真

に捧げものを持っているが、頭に輪光はない。
《神の祈り》は夜の情景と思われる暗い背景であるのに対して、この作品では黄色と朱色の壁が円状の明るい背景に踊る男達と思われる不思議な図が描き込まれ、異質な空間となっている。また、本作品の左側の女性の衣服の白い絵具の下にはヴァーミリオン層が認められ、当初の段階では二人の衣服の色は共に朱色だったと思われる。このことは、《神の祈り》の二人の女性が白い衣服であるのと対照的である。更にこの作品が切断される以前の、元の画面サイズは91×65cm（P30号に相当）と推定され、《神の祈り》を大きく上回る、よりモニュメンタルな作品であったことが想像できる²⁾。

《子供》と《三人の顔》が関連を持つことは、村田真宏が、「《三人の顔》と呼ばれる作品の、《子供》（ブリヂストン美術館蔵）のエスキースが描かれる以前に完成されていた横向きの二人の女性³⁾と指摘しているように、以前から知られていた。田中によって、この2作品が当初は一体のキャンバスだったことが発見されたのである。

こうした関根の再制作については、友人たちが証言している。たとえば、三浦末松は「油の方は経済上の関係もあって、気に入らなければ片端から塗り潰しては其上へ描いてゐた⁴⁾と述べ、村岡黑影は「猶彼は物質的に非常に圧迫を感じながら只管製作に努めた。彼の家は彼の製作に満足するだけの材料を与ふるに困難であつた。けれども家人は良く理解し絶対の自由と出来得る限りの補助とを与えてゐた。それで絵は二三度塗りつぶしたキャンパスになつてゐるのがいくらかもある。」⁵⁾と記している。

《子供》は、女性像の衣服が描かれた画面を下地にして、その上に新たに描かれた人物像ということになる。留意しておきたいのは、関根が古キャンバスの下地のマチエールや色彩を再制作で生かしていたことである。それが、重厚でありながら同時に新鮮さを失わない味わいを醸し出し、再制作作品の魅力の一つになっている。

3. モデル

この人物画に描かれた少年がだれなのかという問題について、ながらく「近所の小児」と考えられてきた。関根の小学校以来の友人で、最晩年の関根とも親しく交わった太田鶴三郎が、関根が亡くなって2カ月後、すなわち《子供》が描かれて

間もない時期に、次のように語っているからである。

最後の作は二十五号の自画像と二科へ出品の五十号『慰められつゝ悩む』と十二号の赤い着物を着た小児とです。小児のは実に短時間で成された物で家人が外出して私と留守居してゐる間に近所の小児を呼んで画いたものです。その時の有様は今でもはつきりと眼前に浮んで来ます⁶⁾。

以来、そう信じられてきたのだが、関根研究に多大な貢献を残した土方定一が、モデルは関根の末弟・武男だという新説を発表する。土方は、関根の足跡を訪ね網羅的に関係者から聞き取り調査を行った。制作から54年後の1973年に、以下のよう

に書いている。関根正二のいちばん末の弟さん〔武男〕がおられることなどは予想もしなかったとほくは書いたが、ほくの研究が関根正二の故郷、福島県白河市搦目から出発し、そこの戸籍抄本から出発したために、関根の父、政吉が搦目にいたときの政吉の家系はでているが、東京にでてきてから生まれた新しい家系を知るのを怠ったためである。調査というものの面白さもこんなところにあるのかも知れない。それより、現在、ブリヂストン美術館に飾られている例の「子供」像、背景を濃い青の空色とし朱の着物を着、両手を前にあわせ、こちらを見ている子供の確信的な像は、「私の子供のときの肖像です」といわれたときには、ほくは「ほんとうですか」とあやうく驚きの質問を発しそうになっていた。というのは、この「子供」は、偶然、遊びにきていた子供を関根が二、三時間で描いたといわれており、ほくもそう思っていたからである。そういわれて、その方の顔を見ると、そこに、なんとなく幼いときの風貌が背後の映像のように浮かんでくるから不思議である、こういう経験は、誰でも同窓会などに出席して、そこに会う級友たちの年齢の変化の背後に、いつの間にか浮かんでくる若き日の映像の経験と似ている⁷⁾。

関根武男は、1913年1月14日生まれである⁸⁾。だから《子供》が描かれたとき、満6歳になったばかりということになる。描かれた少年の年格好にふさわしいといえるだろう。

因みに、武男は兄・正二の日記に二度登場してくる。例えば、1917年9月3日の条には、「弟武男をつれて、上野山〔清貢〕の所へ行く。十二時迄遊ぶ。伊東〔深水〕に逢つて帰る」⁹⁾とある。14歳違いの末弟を、関根は可愛がっていたようだ。

では、「近所の小児」と何なのだろうか。目撃者だという親友の証言を一方的に否定はしにくい。おそらく、太田は武男を知らなかったのではないだろうか。太田と二人で自宅にいた関根が、外で遊んでいる武男をモデルにするため呼び入れたとき、わざわざ太田に紹介しなかったのだろう。関根が武男像を描いているのを、その弟と知らずに、太田は固唾をのんで見守っていたのだと考えてみたい。

このモデルの問題を、画面の署名と絡めて考えてみよう。《子供》は、めずらしく「masaji」と署名されている。この署名について、伊藤匡は、こんなふう述べている。

このうち、子供を描いた作品群で注目したいのはサインである。前述の《子供》のサインは masaji くまさじ) となっている。このたび初めて公開される作品群の中にも男児を描いたものが4点あり、そのうち3点にやはり masaji のサインがある。同じサインの入った作品はもう一点《少女の顔》(fig.7) という題のつけられているペン素描があるが、これも描かれているのは少女というより幼児である。1918年から19年にかけて、関根は集中的に子供、特に男児を描いていることになる。しかも、masaji サインはすべて男児または幼児の像である。《死を思う日》に Shoji Sekine というサインを入れて以来、つねにくししょうじ) を示す S. SEKINE という



fig.7
関根正二《少女の顔》1918年、インク、
個人蔵

サインを入れていた関根が、子供を描いた絵に限ってくまさじ) サインを入れていることには、彼なりの意図をみてもよいだろう。それは一種の自画像であり、幼い頃の自画像とでもいうべきものではないか。そしてそこには、純真、無垢な自己というもはや現実にはかなえられない夢想を託しているように思われる¹⁰⁾。

伊藤が、この署名を「純真、無垢な自己というもはや現実にはかなえられない夢想を託している」と見ているのはとても興味深い。関根は、画家として「しょうじ) で通したが、本名は「まさじ) であり、家族からは「まーちゃん」と呼ばれていた。「masaji」署名の作品群をていねいに見極めていく必要があるのだが、この署名は、端的に、おそらく家庭内の出来事を意味しているのではないだろうか。《子供》が末弟・武男を描いたものであるとするならば、まさしくそう呼び合った兄弟どうしの協働作業ということができる。この署名は、「武男説」を補強するものと考えたい。同じく「masaji」署名がある素描《少女の顔》(1918年)は、《子供》と同じ武男を描いたものではないだろうか。

4. 来歴

次に、《子供》の来歴について整理してみよう。ブリヂストン美術館は、この作品を1956年9月、東京画廊から15万円で購入した。そのときの経緯を、後年、同画廊の山本孝が大原美術館長・藤田慎一郎に、以下のように語っている。

藤田 この作品〔関根正二《信仰の悲しみ》〕も、大原〔總一郎〕さんはことのほか気に入って「関根の数少ない絵の中でも傑作だから、大切にしておけ」と僕に言っていた。

ところで、この作品が大原美術館に入って、石橋〔正二郎〕さんが残念がられたと聞いているが。

山本 その通りです。

この作品が大原に入った後に出てきたのが、今、ブリヂストン美術館にある同じ関根の「少年像」だった。僕の家内の親戚で大塚〔銀次郎〕というのが、戦前、神戸画廊というのを経営していて、元町画廊の顧問のような仕事をしていて、そこに「少年像」が出てきて「いい絵だから買ってあげ」という連絡が入ったので、翌日、

神戸に行って引き取ってきた。

そこへ、どこから噂を聞きつけてきたのか分からないが、ブリヂストン美術館の岩佐新さん（当時、ブリヂストン美術館美術部長）が汗を拭きながら飛び込んで来た。まさかその時は関根を見に来たとは思わなかった。その前に「信仰の悲しみ」が大原に入った時、岩佐さんが悔しがったという話は聞いていたけれどもね。入ってくるなり「何か見せろ」と言う。出したのが気に入らなくて「もっとあるだろう」と言うので「少年像」を見せたらもう駄目。「石橋が駄目と言っても、何としてでもくどくから、値段はいくらでもよからこっちへよこせ。大原にはもう『信仰の悲しみ』が入ったんだから、東京にも一点置いておけ。倉敷まで見に行くのは大変だから」と言われて、それではということになった。石橋さんはとても喜ばれた。

美術商にとっては、銭金じゃないこうした喜びは格別だね。画商の務めは格のある所へ絵を納めることで、いくら「少年像」が高く売れるからといっても、その作品に見合わないお客さんは避けるべきだと思う。前にも触れたけど、かつては反町さんに光琳の「紅白梅図屏風」をお勧めした時、「いや、これは私が買うものではない。格が違う」と言われたことがある。コレクターはこれくらいの気位を持って絵を集めてほしいですね。

藤田 その通りだと思う¹⁰。

1950年代の、ブリヂストン美術館と大原美術館が繰り返した作品収集のつばぜり合いが活写されている。ブリヂストン美術館主事（のち事業部長）・岩佐新の、関根作品収集にかける強い情熱を伝えるエピソードである。《子供》が東京画廊に入ったという情報を、岩佐がどのように入手したのか、興味がそそられる。

東京画廊は、大塚銀次郎を仲介して、神戸の元町画廊から《子供》を入手している。大塚は元毎日新聞記者で、1930年、神戸の下鯉川筋に「画廊」を開いた人物である。この草分け的なギャラリーは、のち他と区別するため通称「神戸画廊」あるいは「鯉川筋画廊」と呼ばれた。1943年に閉鎖されるまで40回以上の展覧会を開催し、1932年よりパンフレット『ユーモラス・コウベ』（のち『ユーモラス・ガロー』）を毎月発行、関西の美術家たちが出入りする憩いの場所、拠って立つ重要拠点となった。

大塚の作品入手先、元町画廊の佐藤廉は、こん

な思い出を記している。

詩人・竹中郁先生といえば小磯良平先生と神戸二中の同級生で、一生を大の親友として貫いた方である。渡欧も一緒、その時のパリでの背広も写真で見ると同じである。小磯良平作品集にも「竹中郁像」が再々出て来ている。その竹中先生が須磨の東、月見山（須磨離宮のある所）に住んでおられ、私が須磨寺の本店から支店を元町に出した当時、山陽電車で竹中先生とよくお逢いしていた。

私の母が、竹中先生の義母と小唄仲間であった関係で、大変親しくしていただいていた。先生はさすがに美術の造詣が深く、こんな思い出がある。

元町画廊の店頭に前田寛治作「婦人像」二十号を陳列していたが、誰も知らない。また関根正二作「弟」二十号（現在ブリヂストン美術館所蔵で絵ハガキになっている名品、NHK日曜美術館で紹介される）等、当時は数十万円台の売価であったが、世間的に余り知られていないために売れない。関根正二は二十歳の若さで他界した天才作家で、よほど美術通でないとき時は一般に知られていなかったが、その作品をほめていただいた。私自身も関根正二をもう一度認識し直したほどである¹²。

《子供》は第二次世界大戦後、しばらくのあいだ元町画廊の店頭を飾っていたらしい。また、同じく元町画廊に務めていた岡田弘は、筆者に次のように語っている。

昭和30年頃、関根正二作品を画廊に飾っていた。その頃は全くだれも目もくれなかった。その頃、大塚銀次郎さんと親しくしていて、学ばせてもらっていた。大塚さんに「ちょっと貸してくれ」といわれて、11万円で渡した。元値は10万円だったが、1万円引いて、2万円乗せた。2カ月して、『芸術新潮』にブリヂストン美術館所蔵としてカラー図版で紹介されていてびっくりした。東京に行ったときには、今でもよくブリヂストン美術館に立ち寄っている。関根作品は、画商を始めたころに手がけた作品で、自分の精神的な拠り所になっている。この作品は、京都の藤井弘文堂という表具屋さんから入手したものだ¹³。

元町画廊は、第二次世界大戦後、藤井弘文堂か

ら《子供》を入手している。筆者が藤井弘文堂に問い合わせたところ、その入手先は、今はもう分からないという。注目しておきたいのは、1941年10月に大礼記念京都美術館（現・京都市美術館）で開催された「現代美術十月陳列」の出品目録に、

十五 関根正二 小児 内貴清兵衛氏蔵と記されていることである。写真資料がなく、この《小児》がブリヂストン美術館の《子供》かどうか、決め手はない。しかし京都に住んだ稀代のコレクター・内貴清兵衛が持っていたものと一致する可能性は高いのではないか。その類い希なる審美眼は、関根の代表作を所有するにふさわしいものだ。

今度は逆に、この《子供》が制作された時期からたどってみよう。

この作品は、完成後まもなく、1919年6月2日から25日まで東京・神田裏神保町の兜屋画堂で開催された「第一回新進作家油絵展覧会」で発表された。目録には、

1 男児の習作 1919 P.12 80yenとある。兜屋画堂は5月3日に開設されたばかりだった。この出品を生前の関根が喜んでいたり、斎藤与里がこんなふうに語っている。

其の内兜屋画堂開店の話があつて、関根君にも出品して貰ふ事にもなつて居たし、又関根君の方でも、画堂の出来た事、同時に君自身も自由に出品する事になつたので、何でも大層嬉ばれたさうです。之れは関根君のお母さんや、君の友人などの話したが、何でも初めて君が兜屋に『子供』を出した時、『俺れの絵も兜屋に陳んだから是れで死んでも好い』と云つて嬉んで居られたさうです。其の頃は体の方も悪かつたのでしたらうが、其の後急に死くなられたのでした¹⁴⁾。

このとき、売価80円だったが作品は売れなかった。

次にこの作品が公開されるのは、同年9月3日から25日まで同じ兜屋画堂で開催された「信仰の悲しみ—関根正二遺作展覧会」である。目録には、
30 子供 八〇、〇〇とある。やはり売価80円だった。関根の死そのものが付加価値をつけたのか、このときは買い手がつく。村岡黒影は、以下のように振り返っている。

人としてはこんなことで誤解され、芸術として又非アカデミックとして所謂社会的冷遇を受

けながら、九月兜屋に開催の遺作展覧会は予想外の好結果を来した、出品の絵は全部買約になった。そして買つてくれた人々は総て彼を理解し彼の芸術を好む人であつたことを知つた僕等は衷心感謝と喜悅とを持つものである¹⁵⁾。

《子供》の新しい所蔵者は、奥田駒蔵である。『美術写真画報』1巻8号（1920年9月）に載った川路柳虹の「夭折したる二人の画家—関根正二と村山槐多の作品について」という記事の挿図として、《子供》が掲載され、

小児像 関根正二 鴻之巢主人蔵というキャプションが付されている。奥田は、京橋区南伝馬町二丁目（現・中央区京橋2丁目）にあった西洋レストラン「メイゾン鴻之巢」のシェフ・経営者で、与謝野晶子と親しく交流し、鴻巣山人と号して三越で日本画の個展も開く才人だった。奥田が《子供》を入手したのは、おそらく遺作展のときだろう。奥田は、関根作品を熱心に収集し、その画集刊行計画に加わることになる。『みづゑ』1921年6月号の情報欄に、「故関根正二氏、遺作遺稿の出版を協議す可く知友は五月十五日午後二時からメイゾン鴻之巢に集会」とある。また、1921年8月の新聞記事には、次のような興味深い事実が記されている。

一昨年六月、廿一で夭折した天才的洋画家関根正二君を追慕し、その遺された芸術を熱愛する人たちによつて、遺作画集の編纂が着手された。主として骨を折つてゐるのは鴻の巢の主人なる鴻巣山人と、洋画家瀬津伊之助氏等で、右画集には遺作油絵三十点、素描八十点、並びに遺稿を網羅し、一千部に限り一部価廿円で頒かつ計画なさうだ。それに就ても思ひ出されるのは関根君が第五回目の二科展で樗牛賞を得た出世作「信仰の悲しみ」だが、この原画は今兜町辺の村上濱吉といふ人の手許にあつて、当時八十円とかで買取られたものだと云ふ。さる呉服屋さんの若旦那で余り絵画蒐集に凝るので禁治産の宣告を受けか、つてゐるといふ変り者が、最近買ひ入れた二枚折り「楽器を持てる女」は、千百五十円といふ関根君の作としては記録破りであつた。で、此等の二点が今度の画集に収められるのは勿論、瀬津氏所蔵の「死のおどり」外数点、鴻巣山人所蔵の油絵十一点、小説家久米正雄氏所蔵の数点など、準備は大分整ひかけてゐるので、目下はその出版費用一万五千円の調達に奔走中だとの話¹⁶⁾。

1920年代初頭、関根をめぐる熱い思いが東京を駆け巡っていた。だが結局、画集刊行は計画倒れに終わる。売価20円という高価な画集が出版されていたならば、現在所在不明の作品を含め、我々に貴重な情報をもたらしてくれたことだろう。

この新聞記事は、奥田駒蔵が関根の油彩作品を11点も所有していたことを伝えている。当時確認できた油彩30点のうちの3分の1を持っていたことになり、歴史上、最も重要な関根正二コレクターだったといっただい。奥田は、1925年10月1日、43歳で亡くなった。その死は、永井荷風の『断腸亭日乗』にも記されている。おそらくその時点まで、関根作品コレクションは奥田家にあったのだと思われる。

さて《子供》は、どのようにして東京から京都に移動していったのだろうか。気になるのは、奥田が北大路魯山人と親しかったことである。魯山人が京橋区南鞆町（現・中央区京橋2丁目）に開業した大雅堂美術店と美食倶楽部は、メイゾン鴻之巣と目と鼻の先だった。魯山人はこの西洋レストランを好んで毎晩のように訪れていたらしい。店がはねた後、同じ歳の奥田と魯山人は連れだって飲み歩いたという。メイゾン鴻之巣の看板は魯山人が彫ったものだったし、魯山人の発案で奥田はスッポン料理店「丸屋」も出店している¹⁷⁾。1923年9月1日の関東大震災によって、メイゾン鴻之巣と美食倶楽部は焼け落ちた。奥田は同じ場所にレストランを再建し、魯山人は1925年3月、永田町に星岡茶寮を開業する。奥田が亡くなったのはそんな時期だった。その遺品整理に魯山人が関わり、それがきっかけで魯山人と縁の深い京都の内貴清兵衛のもとに《子供》が移っていったと想像してみたいのだが、いかがだろうか。

来歴を整理すると、以下のようになる。

関根家

1920年9月以前、奥田駒蔵、東京

(?) 内貴清兵衛、京都

藤井好文堂、京都

元町画廊、神戸

大塚銀次郎、神戸

東京画廊

1956年9月、石橋財団（ブリヂストン美術館）

メイゾン鴻之巣からブリヂストン美術館へ、京都と神戸を回って、《子供》は再び東京・京橋の地に戻ってきたことになる。その間、20世紀の日

本の美術界に足跡を残した人物、機関が関わった。由緒ある歴史といっただいだろう。

5. 最後のスタイル

最後に、《子供》の表現を考えてみよう。

関根の最後の油彩作品、《慰められつゝ悩む》は、1919年9月の第6回二科展に出品された後、関根家にあったが、関東大震災のときに一時避難のために持ち出されて以来、所在不明となっている。50号とも60号ともいわれるこの作品は、いま、二科展にあたって作製された絵ハガキ (fig.8) によってしかその図様と色彩を知ることができない。空を思わせる青を背景にして、アザミが咲く野原に立つ3人の女性と一人の少年を組み合わせた作品である。《慰められつゝ悩む》と《子供》は、色



fig.8
関根正二《慰められつゝ悩む》の
絵ハガキ

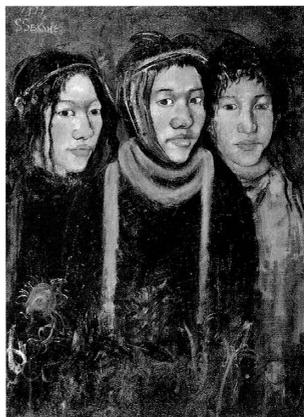


fig.9
関根正二《三星》1919年、油彩、
東京国立近代美術館

彩と描法においてそれまでの作品と一線を画している。

もう一つ、1919年の年記を持つ油彩画に、《三星》(fig.9)がある。恐らくこの年の早い時期に描かれたものに違いない。自画像を姉と恋人がはさむ人物画と考えられているこの作品は、背景が暗く、《信仰の悲しみ》から繋がる情念の世界を浮かび上がらせている。筆致も荒々しい。闇の世界といってもよいものである。16歳のときの二科展初入選作、《死を思う日》から《三星》にいたるまで、依頼された肖像画をのぞいて、関根は一貫して重々しい闇の感情を油彩画で描いてきた。《慰められつ、悩む》と《子供》のみが、明るく澄んだ色彩に被われているのである。夜から昼の世界に飛び出してきたかのようである。

また、描法も異なっている。田中千秋は、《子供》の筆致について以下のように詳述している。

顔、頸の肌身部は他の部分より念入りに描かれている。筆致はストロークを使わず細かく筆先を押し付けて絵具を置く手法をとっており、絵具層の厚みはかなり薄い粘稠度は高く、筆の離れた跡が鋭く立ち上がっている。また、陰影部の黒や褐色の混入は少なく、代わりに青や朱などを使っている。これらは関根の他の作品にはあまり見られない描き方である。

衣服の朱は薄塗りで、胸と下腹部の間では下層の朱をそのまま使用している。また、背景の青は粘稠度が低く、人物が描かれた後一気に塗られており、顔の輪郭はこの青で決定されている¹⁸⁾。

眉、まぶた、鼻梁、唇、頬、顎は、鋭い描線で形づくられている。ペンによる素描と共通する硬質な線で、その硬さが作品全体の印象をシャープなものにしている。しかしそれでいて、画面にはよそよそしさが無い。色彩とマチエールの力によるものだろう。これらの特徴は、《三星》とそれ以前には見られなかったものである。

こうした変化は、関根が最期を意識したからの集大成というよりも、新しいスタイルへの転換の萌芽だったのではないだろうか。関根に時間が与えられたならば、この新しいスタイルは深化を遂げていったに違いない。今さらながら、その早世が悔やまれてならない。

また、田中は、《三星》、《子供》、《慰められつ、悩む》の関連について、《三星》の赤外線写真の所見から、次のように述べている。

【《三星》の】赤外線写真では、中央の人物の頭の後に輪光が、また、胸には乳房と思われる線が確認できる。友人の証言によって、関根の自画像とされるこの中央の人物は、少なくとも下描き段階では女性像として描かれていたと考えられる。そして、《三星》の構想が当初三人の女性像であったとすれば《慰められつ、悩む》の三人の女性（中央の女性はやはり輪光を頂く）との関連を再検討すべきであろう。今のところ人物の容貌の類似性といった漠然とした印象でしかないが、《三星》の三人と次にとりあげる《子供》の肖像が、絶筆となった《慰められつ、悩む》の画面に展開、昇華して行ったとの推測も成り立つ¹⁹⁾。

1919年前半の6カ月間に、関根は新しい展開を着実に遂げていたのである。その軌跡を、《子供》は鮮やかに印している。

6. おわりに

《子供》は、現在、存在が確認されている関根正二の油彩画約30点のうちで、最後の作品である。短い画業においても鮮烈な展開を示した関根の、最晩年の様式を雄弁に語る。またこの作品は、没後3カ月で開かれた遺作展以来、関根を愛する人々に順々に手渡されてきた来歴を持っている。画集刊行計画など、熱い思いの中心に位置している。

残されている課題は、最後の様式がどのようにして生まれてきたのか、どのようなきっかけがあったのか、最後の数カ月に関根はどのように制作に立ち向かったのか、を描き出すことだろう。この作品と関連が深い《慰められつ、悩む》が、ふたたび現れることを願わずにはいられない。行方が分からなくなってから90年になるのだが、希望は捨てずにいたいと思う。

本稿を、故・田中千秋氏の思い出に捧げる。

註

- 1) 遠藤彰子「少年のいる情景十選(5) 関根正二『子供』」『日本経済新聞』2002年7月16日付。
- 2) 田中千秋「関根正二の《三星》と《子供》—塗り重ねと切断—」『現代の眼』453号、1992年8月。
- 3) 村田真宏「関根正二作『天平美人』屏風について」『福島県立美術館研究紀要』第3号、1988年3月、p.68。
- 4) 三浦末松「関根君と靈感其他」『信仰の悲しみ—関根正二遺作展覧会』兜屋画堂、1919年(再

-
- 録：酒井忠康編『関根正二 遺稿・追想 新装版』中央公論美術出版、1991年1月、p.210。
- 5) 村岡黒影「関根君の事ども」『信仰の悲しみ—関根正二遺作展覧会』兜屋画堂、1919年（再録：『関根正二 遺稿・追想 新装版』、pp.216-217）。
 - 6) 太田鶴三郎「思ひ出するがまゝに」『信仰の悲しみ—関根正二遺作展覧会』兜屋画堂、1919年（再録：『関根正二 遺稿・追想 新装版』、p.225）。
 - 7) 土方定一「関根正二、続遺聞」『繪』111号、1973年5月、pp.12-13。
 - 8) 堀宜雄・伊藤匡編「関根正二年譜」『生誕100年 関根正二展』（図録）神奈川県立近代美術館ほか、1999年。
 - 9) 酒井忠康編『関根正二 遺稿・追想 新装版』中央公論美術出版、1991年1月、p.82。
 - 10) 伊藤匡「新しい神話—関根正二の人間像」『生誕100年 関根正二展』（図録）神奈川県立近代美術館ほか、1999年。
 - 11) 藤田慎一郎『大原美術館と私—50年のパッセージ』山陽新聞社、2000年12月、pp.180-182。
 - 12) 佐藤廉『画商の眼』神戸新聞総合出版センター、1996年1月、p.246。
 - 13) 筆者が、2001年3月26日、岡田弘から電話で聴取したもの。
 - 14) 斎藤与里「関根正二君遺作展覧会に際して」『信仰の悲しみ—関根正二遺作展覧会』兜屋画堂、1919年9月（再録：『関根正二 遺稿・追想 新装版』、pp.199-200）。
 - 15) 村山黒影「関根正二君を憶ふ」『みづゑ』178号、1919年12月（再録：『関根正二 遺稿・追想 新装版』、p.185）。
 - 16) 「ビールの泡」『讀賣新聞』1921年8月17日付。
 - 17) 中村伝四郎「美食倶楽部以前」『星岡』63号、1935年12月。山田和『知られざる魯山人』文藝春秋、2007年10月、p.250。
 - 18) 田中千秋「作品調査報告」『館報』40号（1991年度）、石橋財団ブリヂストン美術館・石橋美術館、1993年2月。
 - 19) 前掲註2。